
正義のために……

北方宗一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義のために……

【Nコード】

N4356W

【作者名】

北方宗一

【あらすじ】

日本国。国権として外交問題やテロリズムに対して軍事行為を行えなず、基本的人権の名のもとに対外工作機関をおっぴらに置けない国。この国の汚れ仕事を引き受けるために十年前設立された機関、公安調査庁 庶務13課、通称「不規則な13番」イレギュラー・サーティーンに所属する少年工作員、神山健二と霧谷美里の二人は高校に生徒として潜入して、機密情報をつかんでしまった高校生、紀伊幸太郎を護衛することになった。幸太郎を狙う敵とは！？

プロローグ（前書き）

学園ものですが、銃撃戦や政治に関する描写がありますそのと
ろよく注意してください。

プロローグ

「敵は何を持っている？」

「カラシニコフとRPG-7ね」

ヘッドセットから聞こえてくる美里みさとの声に、面倒な事になったと俺は心の中で毒づいた。所詮は素人連中だと思っていたが、大きな間違いだった。反動の大きいカラシニコフは扱いにくい代物だ。だといふのに奴らは早々に装備させている。つまり基礎の体力・射撃訓練は済んでいるということだ。ついこの間まで大学生をしていた青年10人を、何らかの形で焚たきつけ、革命戦士たにしてしまったのだから、上層部が焦るのもしょうがない。

「突入時にフラッシュ・バンを使う」

「りょうかいっ！」

スナイパーの美里がこちらに返す。のん気な返事だった。

「3、2、1！」

次には手榴弾を倉庫の中に放り投げ、目を閉じ、耳を塞ぐ。手榴弾が床を跳ね、転がり、閃光と轟音で場を支配する。普通の手榴弾なら中にいるテロリスト共は木端微塵だが、今回使用したフラッシュ・バンは相手から一時的に視覚と聴覚へいじう、そして平衡感覚を奪う。

「!?!」

効果は抜群だったらしい。中にいるテロリストの殆どは、のた打ち回って、声にならない声で絶叫している。だがその中にも本物がいた。付け焼刃な訓練なんかではない、本物の軍事・工作訓練を受けたような奴が。そんな奴はフラッシュ・バンの効果なんてモノともしない。目と耳をすぐ塞ぐからだ。

そいつが今回のターゲットである日本人民解放戦線の幹部、野尻聡のしり子こであった。五〇代後半にもなるのに無駄な肉はなく、眼光は威嚇するように鋭い。顔には30年以上にも及ぶ逃亡生活の苦勞を滲ませるような皺が無数に刻まれていた。

「野尻聡子。貴様を逮捕する！」

自分の愛銃であるP90を構えて躍り出る。

「ははっ！逮捕お？なめんじゃねえぞお、小僧お！」

野尻自身はカラシニコフを構えている。

「ならば…、動けなくしてでも逮捕するまで」

20メートル向こうの野尻に向け銃口を向け、踏み込む。

「っ、」

相手の一瞬の動揺。これを狙っていた。走りながらP90のトリガーを引く。5・7ミリ弾が放たれるが、走りながらでは当たらない。野尻も逃げながらカラシニコフを撃ってくるが、反動とお世辞にも精度が良いとはいえない銃身で弾がばらける。

カラシニコフが弾切れし、野尻があわててマガジンを換えている間にいつきに畳み掛けようと一息で接近し、肉薄すると、徒手格闘の要領でカラシニコフを蹴りで叩き落とそうとした。が、野尻は寸前であわててマガジンを換えていた。

これではどうしようもない。早くしないと形勢が逆転しかねない。そんな時、不意に野尻のカラシニコフが遠くからの銃声とともに吹き飛んだ。

「サンキュ、美里」

狙撃した張本人に感謝の言葉を呟く。

「これで貴様の敗北は確定だ！」

野尻に詰め寄り銃口を向ける。すると

「社会全体主義マンセーッ！」

「！」

不意に危険を察知し、野尻から離れて伏せると、野尻自身が爆発した。

「木端微塵か・・・」

「初めから・・・そのつもりだったんじゃないの？」

美里は俺の顔を覗き込んで言う。長い栗色の髪、くりつとした目の、整った顔が覗き込むが、いま彼女が背負っているものは、そんなかわいらしい顔に似合わない、丈の長い狙撃用のボルトアクションライフル、AWであった。アークライク・ウオーフエア

ある程度の反撃や自決も想定はしていた。だが自爆攻撃なんて選択肢はなかった。最後の抵抗がこつも強烈とは・・・。

「それにしてもどうだ、予備軍どもは」

「どうも、みんな変な薬を飲まされていたようだよ」

と美里は書類を手渡してきた。

渡された書類には薬品の名前がずらりと並んでいた。そのすべてが幻覚剤や麻薬の類である。精神的に高揚させ、テロに対する罪悪感、死に対する恐怖感を無くし、従順な「戦士」へと改造するのは必須となるであろうものである。これほどの薬物が投与されたとすれば、一生医療刑務所コースになりかねない。

「それより、ダイジョーブだった？」

「えっ？」

いきなりの言葉

「ケンくんはいつもムチャしてばかりだもん」

「大丈夫だ」

そう返すと「よかった」と心底安心しているようだった。

「それはそうと課長から話があるんだって」

「いきなりだな」

まあ『いきなり』には慣れている。作戦には突発的事項はつきものだ。

「どうも新しい『仕事』が決まったみたいだよ」

「こつも早いと不審だな」

「まあ、行けば全てがわかるよ」

美里の言葉に背中を押されて課長のところへ急いだ。

「すまん、こつもすぐに」

白髪交じりの初老の男 課長は椅子に座って待っていた。

「いえ、それで新しい任務とは？」

「単刀直入に言おう。今回説明する任務はとある人物の警護だ」

「？警護なら警察のSPに任せていればいいでしょう」

「いや、そうはいかないんだ、コレが」

まあ、そうだとは思っていたが。

「それで、そうはいかない理由とは」

俺が課長に尋ねる

「警護目標がまったくの民間人だ。しかも未成年」

「犯罪の関係者とかではなく？」

美里が疑問を口にする

「…まあ、厳密に言えば関係者ではある。テロに関係する機密文書を持っている。だから表向きには明かせない。明かしたら状況がさらに悪化しそうなのでね。しかも警護対象本人はそんなことは自覚していない」

そんな危険なことになっているとは

「よつて今度の任務は潜入警護だ。神山健二、霧谷美里、両名は

四月五日より対象が通う高校に転入という名目で潜入し対象と接触、信頼を獲得し、対象から機密文書を奪取し、さらにテロリストから護衛せよ。」

なるほど、これだと俺たちが適任なわけだ。

「君たちの年齢からみても人選は適切だと思う。健闘を祈る」

「はっ！」

そう俺、神山健二と仲間の霧谷美里は世間一般には高校生といえる年齢だった。

教科書を見て勉強の内容を確認する。こんな時に先輩や同僚が役に立つとは思わなかったが、まあ重要なことは頭の中に叩き込んだ。それにしても高学歴ばかりだな、この組織は。東京大学出身が幹部にざらにいるし、防衛大学校出身もいる。彼らから学んだことは勉強だけでなく、学校では学園ドラマのような日常はない、もっと味気ない学業と人間関係に振り回される日々だということだった。

そんなことを考えていると美里が質問してきた。

「ケンくんは学校に通っていたことがあるの？」

そういえば俺は小学校には二年生までは通っていたっけ。だがそれも九年くらい過去の話。いまはここで強襲戦のスペシャリストをやっている。本当に久々の学校だ。

「一応」

「へえ、うらやましいな」

「え？学校へ行つたこと無いのか？」

「うん、一度も」

まったく知らなかった。現代日本で一度も学校に行ったことがないなんて。

「ここに来る前から行かせてくれなかったの。」

「そうか」

これ以上、詮索しないことにした。誰にだって触れられたくないモノはある。俺にだって。

「さて、明日から学校か。」

「トモダチ、できるかな？」

「どっちみち警護対象とは友達にならないと。迂闊うかつなことはできないな。」

「そうだね。」

考えても見れば、彼女としては実質的には初めて、此処にいる人以外とコミュニケーションをとることになる。不安になるのは当たり前か。

「大丈夫さ。自然体でいこう。」
美里に言い聞かせた。ただどこか自分でもその言葉に自信が持てなかった。

ネクタイを締めブレザーに袖そでを通し、鏡で服装を確認する。問題ないことを確認すると今度は机上の9ミリ拳銃P220を手に取り、弾が薬室に入っていないことを確認し（規約で薬室チャンバーに弾を入れて携帯すること、つまりすぐ撃てるような状態にすることが禁止されているからだ）、ブレザーのホルスターに改造した内ポケットに入れる。

「どう？似合うかな」

美里が女子のブレザーを着て、スカートをひらひらさせている。

「似合ってるよ」

実際、制服を着た美里は可愛かった。

「ありがとう」

そんな風にはほほ笑む美里はさらに可愛かった。

1st mission 登校初日(前書き)

さて、任務が決まった二人は高校へ

注意

若干きつい表現があります。特に最後の会話の多い部分には嫌悪感を催す場合もあるかもしれない内容があります。何が来ても大丈夫な方のみお読みください。

1st mission 登校初日

「こちらが転校生の神山健二君と霧谷美里さんだ」

太っていて眼鏡をかけた新担任の小坂（こさか）が紹介する。高校二年の新年度早々の転校生は男女それぞれ一人ずつ。男のほうは平均身長くらいでやせ気味、顔はアイドルグループにいてもおかしくなさそうである。女のほうは少々幼げのある顔だ。栗色の髪が目を引く。スタイルは平均か、それより少しよさそうだ。

「ども」

「初めまして」

彼らが挨拶をするとクラス中が沸いた。

「美少女だ、美少女が来たぞ」

「キヤー、イケメンきた！」

各自が思い思いのことをペチャクチャしゃべっている。まったく下らないもんだ。面食いどもが。

「どうしたの？下僕のくせにムカついた顔して」

前席の黒髪ロングの美少女 河合杏佳（かわい きょうか）が話しかけてくる。

「面食いどもがうるさいなあ、なんて」

「あんたらしいわね」

「それに許可されてない会話は不快だ。お前はもう黙っている。

担任の小坂の我慢は限界だ。すぐにでもキレる。下僕（げぼく）からの忠告だ」

「分かった。忠告に従わせてもらおうわ」

河合は前に向き直った。小坂が今にもうるさくなつた生徒に静かにするよう怒鳴りそうだ。ほんとにかつたるい。新年度早々不快にされてはたまつたものではない。

「はあ」

ため息をついてしまう。幸せが逃げると家族や河合から注意されることが多いが、それでもやってしまうのはしょうがない。

次の瞬間、場の空気が小坂の怒鳴り声で鳴動（めいどう）し、また、ため息を

ついでにしまった。

この学校 大誠学園高等学校は私立高校としては大分小規模な学校だ。第一に水泳用のプールがない。第二に校舎に付属するグラウンドが小さく、部活動では野球部がほぼ占拠してしまふ(まだ人工芝グラウンドがほかにあるからいいが)。第三に校舎の建屋が他校より小ぶりなもので4棟(うち一つは体育館)しか存在しない。部活動の予算もほとんどが全国大会レベルの柔道と、設備に金のかかる野球に吸い取られてしまふありさま。一応、中学校を併設しているが、中学部と高校部は面識がないのがこの学校の普通である。中学部から続き、高校編入組のトップの一部が入る中高一貫コース通称中学、高校編入組の上位が属する特別進学コース通称特進、高校編入組の下位が属する普通進学コース通称普通が存在する。俺たちは特別進学コースだ。特進、普通あわせて一学年およそ150人、高校全校で450人前後いる。

「あゝ。かつたるかつた」

始業式は本当にかつたるい。

「ホントそうね」

河合が同意する。

「あとは昼飯食べて面倒な業務連絡聞いて終わりか」

「食事はいいな、癒される。そうだ！転校生二人を誘え」

「そうだな」

「ふふふ…。これで下僕が増えるぞ」これ以上増やしてどうするんだ」そ、そうだな。これ以上増やしても得じゃない」

「はあ、もうちょっと普通な友達にするべきだろ。俺も下僕脱出と行きたいm」そうはいかない」チツ、くそつたれ」

「誰がくそつたれだ」

俺の称号は当面の間「下僕」だ

この学校は始業式にも弁当持参だったらしい。うっかり持つてくるのを忘れてしまった。

「やあ、転校生。確か神山だったよな。一緒に食うか」

不意に掛けられた声に驚いた。警護対象自ら声をかけてくるとは。

「ありがとう。同席するよ」

「んじゃ、霧谷さんも一緒にどう？」

都合よく美里も誘ってくれた。

「ありがとう」

「それにしても二人とも弁当は？」

「二人そろって忘れちゃって」

正直に白状した

「そうか。じゃあ昼飯分けてやるうか。」

「いいのか？」

「いいの、いいの。どっちみち今日の体調で食いきれるかわからないし」

「ありがとう」

幸運だ。こちらから信頼を獲得する前に、警護対象から近づくなんて。

彼にすすめられ、ついていくと教室の一角に机が二つ、向き合うように配置されていた。もう先客がいる。黒く長い髪の毛の、若干大人びた雰囲気の女の子だ。

すると不意に警護対象から話を振られた。

「そういや、二人とも転校早々仲いいな。同じ身の上だからか？」

「いや、もともと遠い親戚で知り合いだったんだ。まあ転校の理由が生々しくて……遺産相続とか……」

当初の予定通り偽情報を言って詮索されないようにする。

「……いろいろ苦労してんのな」

「まあな」

「まあ、座れや」

「ほう、主人を差し置いて下僕が場を仕切るのか」

不意に話し出した黒髪の少女は女王か女貴族のようにふるまっている。

「そう言つな」

警護対象はまったく動じない。

「まあ良い。転人生とゆっくり会話できる機会を作ったんだ。今回は許そう」

「そついや自己紹介がまだだったな。俺の名前は紀伊幸太郎。でこいつの名前は……」

「こいつう？まあ良い。私の名前は河合杏佳だ」

警護対象 紀伊幸太郎をまじまじと見る。初め個人情報表を見たときの写真はまさしくガラが悪く怖い顔をしていたが、直に見ると思いのほか優しく理知的な感じがする。どうも写真写りが悪いらしい。体格はがっしりとして、眼鏡をかけている顔は世間一般のイケメンとは違うカッコよさを漂わせている。

「…おい、まじまじ見んな」

「ごめん」

「こつちはいろいろ大変だな。変な妄想を垂れ流す奴がいたりするんだ」

「……というと？」

「勝手に男色家にされちまうんだよ、哀しいことに……」

「それは……ご愁傷様です」

「……さて、昼飯だ、昼飯」

そついうと彼は弁当が入っているのだろう小さい手提げ袋を取り出し、中からプラスチックの箱とステンレスの500ミリリットル水筒を取り出した

「まあ一人につきどれか二つだな」

ふたを開けるとサンドイッチが六つ詰まっていた。味は卵とトマ

トサラダと……どうも豚の生姜焼きらしい。

「残りで足りるんですか」

美里がそう言う

「大丈夫。昼抜いても問題はない」

「本当に？」

「なあに、下僕は去年弁当に箸がなくて茶を一杯飲んだ以外食わずに午後の授業をちゃんと聞いていたことがあるんだぞ。この程度で不調になるわけない」

河合さんはそう自信満々に答える。

「まあ、あんときもきつかったと言っちゃ、きつかったが、耐えないほどではなかったな」

紀伊は「はははっ」と笑う。

「まあ駄弁りはこれぐらいにして早く食べるぞ。空腹で死にそうだ」

河合さんは色気より食い気らしい。すでに弁当箱のふたを開けていた。

「じゃ、いただきます」

紀伊も手を合わせてからサンドイッチに手を付けた。

「それじゃ、お言葉に甘えて」

「いったただつきまーすっ」

美里の言葉とともに俺たちの昼食は始まった。

さて、昼食が終わると下校だ。担任・小坂のホームルーム時の話によると、武装した不良中学生によるカツアゲ・暴行事件が学校周辺で起こっているとか。何とも物騒なこった。しかも遭遇したらしつぽ巻いて逃げるとききた。中学生相手に逃げるなんて、とブーイングが一部で起きたが、手口を聞くとクラスは凍りついた。リーチの長い金属バットや鉄製の棒、ナイフや鉈のような刃物類を持ってい

て、パンチがきかないらしい。対抗するには同様に金属バットや刃物・銃器類が必要だろうか。恐ろしい、ほんとうに。いつの間に中学坊主ぼっすがこんなに狂暴化きょうぼうかしたのだろうか。

「物騒になったなあ。日本にもパンクギャングか」

河合の感想は的を射ていた。

「この周辺で警察二十四時の収録ぐらいできそうだな」

「ほんと。グレた中学生なんてちよつと前までタバコと酒と喧嘩けんかぐらいだと思つてたのにな。というわけで下僕、命の限り主人たる私まもを護れ」

「イエス・マム」

半分投げやりに答える。河合にとって下僕というのは親友とイコールらしい。入学当初からの付き合いだからよくわかる。いうなれば親友のルビが「げぼく」となることがあれば、下僕のルビが「しんゆう」となることもあるといったところか。

「紀伊、いつしよに帰るか」

「神山か。いいぞ、帰るときは大人数のほうがよさそうだな。

少人数でいてボコられたらたまつたもんじゃない」

「そうか。美里、一緒に帰るぞ」

「はあい」

そう答えると霧谷は神山に小走りで一直線に向かつていった。

「お前ら、本当に仲いいな。」

素直に感心する。ただ若干、普通の仲の良さとは違うように見えた。どこか霧谷が神山に依存しているようなふうに見えたのだ。

「どうした？」

「いや、なんでも」

たいてい気のせいだろう。たまにはこんなふうに仲が良い奴等やつらもいるわ。

下校。一部の生徒にとっては学校で一番楽しいひと時……だそう
だ。よくわからないがそういう奴もいるのだろう。校門のところ
幸太郎を待ちながら物思いにふける。それにしても九年ぶりの学校
はつかれた。人の多いところだと体力を消耗する。美里は俺より疲
れているかと思っただらまったく違った。杏佳とガールズトークに花
を咲かせている。初めての学校は楽しかったようだ。そうこうして
いるうちに幸太郎が自転車を押してきた。

「楽しそうだな。以前いた学校でなんかあったのか？」
幸太郎が訊いてくる。

「よく知らないが、以前はいじめられてたとか」
「なるほど」

「ごまかさないと思わぬところで素性がばれる。それだけは避けな
いと。」

「さて、下校だ」
幸太郎の言葉とともに四人で歩き出した。

「それにしても不良中学生に注意、ってちょっと大袈裟な気がする
るんだけど……」

帰りのホームルームの時に感じた疑問を素直に言ってみた。

「いや、そこまで大袈裟じゃないんだ。噂だがその不良のいると
いう中学校、結構酷い有様らしいからさ。それに娯楽には金がかか
るから金欠になりがちなんだろうし、鬭争本能発散できて金が手に
入るなんて、奴らにとっては一石二鳥さ。不良学生が強盗や傷害事
件を起こすのは明白だな」

「そう考えれば筋が通るか」

「それはそうと、噂をすれば……だ」

ふと見ると、周りを自分たちより一回り若い連中が取り囲んでい
た。ざっと見て12人。全員が茶髪か金髪に髪を染めて、ピアスを
付けている。

「かねづるみいっけ」

「いくらぐらい持ってんのかなあ。このダサイヤツラ」

「しかもチヨーカーワイイコ二人もいるじゃん」

なれなれしいというか、ふざけているというか、どこか気持ち悪い。

「貴様ら、年長者ねんちやうじやに対する態度がなっていないな。調教ぢやうきやうしてやるうか」

おぞましいオーラとともに河合さんが口を開く。

「どいてくれないか。関わりたくない」

紀伊も若干にんげん睨みつけるように言う。

「ナニいつてるのかなあ。ああ!?!」

「わっかんねえ。けどコイツラ雑魚ざこそうだぜ」

「早く気持ちイイコトしようや、ネエチャン」

一人が美里に近づき、なめるように見る。美里は気持ち悪そうに見ている。異様な雰囲気から幸太郎は自転車のスタンドを下して、両手を自由にさせた。

「よぉ〜し、さつそく『ブツコ』しよーかあ!?!」

すると各々鉄パイプやバット、ナイフを手に取り

「ヒヤーハアツ!!」

一斉に躍おどりかかってきた。

だが幸太郎も河合も動じない。その気になれば自分たちのP22拳銃けんじゆうで迎撃げいげきできるが、使用規約上、今は警察比例の原則（相手の使用する武器より強い武器は使つてはいけない）が適用される任務だ。しかも、周囲にばれたら極秘警護も元も子もない。するとついに二人が動いた。バットを振りかぶっている一人の懐ふとこに幸太郎は一歩踏ふみ込む。間合いが狂い、リーチよりずっと近くに來た幸太郎に相手はたじろいだ。すると……

「ふぐわあつ!!」

バットを持った一人が吹っ飛ぶ。幸太郎が殴なぐり飛ばしたのだ。

「こんにやろう!!」

また一人が幸太郎に今度は背後から鉄パイプをスイングしてきた。が、

「ぐごおえ！」

振り向きざまに幸太郎が放った裏拳を顔面に食らい、鉄パイプは空振りした。そんななか自分にも……

「カクゴおー！」

ナイフを持った一人がこっちに突っ込んでくる。どうも体格から俺のほうが弱いと判断したようだ。だが甘く見てもらっては困る。こっちは軍隊式実戦型徒手格闘の訓練を受けていて、実際に使っているのだ。直線的に突っ込んでくる相手は、ナイフを腰だめにしていく。そして十分近づくと、腕を伸ばして刺突に適した体制になるはずだ。その時に握った手をひと蹴りすれば……。

「なっ！」

握っていたナイフは宙を舞う。それに気を取られた相手に一息で間合いを詰め、わきの下をピンポイントに殴る。

「げふうっ！」

情けない声の後、相手は気絶したらしい。動かなくなった。ふと美里と河合さんは、と思つて向きなおすと。

「あらあ、ずいぶん弱いね。こんな武器持つて集団で襲っているのに、素手の女の子一人倒せないなんて」

河合さんは倒したらしい不良中学生3人を嗜虐的な目で楽しそうに見ていた。

「げふっ、ごほっ。畜生！悪魔が！」

一人だけ反抗できるだけの体力が余っていたらしい。

「何のことかしら ここに立っているのは天使だけよ」

「ぐはっ！」

にこり、と笑つて残った相手の顔面に鋭い蹴りを入れている。

「すっ、すごい」

その光景を見ている美里は啞然としている。

「な、なんだと……」

「チッ、にげっぞ」

「ヒイイっ」

すると残った不良中学生は、倒れている仲間を見殺しにして一斉に逃げ始めた

「まったく、無駄に体力消耗させやがって」

今、俺達四人は近くのタイ焼き屋にいた。疲れたから、みんなで甘いものでも食べようという話になったのだ。

「はむっ。甘くておいしい！」

「気に入ったか、よかつた」

霧谷はベーシツクな粒餡入りを頭からかぶりついていた。河合は生地に抹茶が練ってある小倉抹茶を、神山は栗餡入りを、俺はカスタードクリーム入りを食べている。

「本当にやばかつたんだな……、不良って」

と神山がつぶやく。

「それにしても結構場慣れしてるな、お前。ナイフを蹴り飛ばすとか、ちよつとやそつとじゃ出来ないだろ。」

ふと思つたことを聞いてみる。

「そついう幸太郎も、大概だけどな」

「ははっ、まあな」

「下僕の場合、こんな戦闘力を持つた事情が特殊でな」

「じじよー？どんな？」

「いやあ、中学の頃に酷いイジメにあつてな。いじめてた野郎どもをまとめて叩き潰そうと実践して、全滅させて、おかげで内申点全部失つて、公立高校なんかは受けなかった。だからここに來たつてわけだ。おかげで輪ゴムと馬面と教師にトラウマがね……」

「ははは」

幸太郎は笑っているが、いつきに空気が悪くなった。重苦しい空気はそう簡単に跳ね飛ばせそうにない。だが個人情報表の暴力沙汰ほつりよくざたに関しての詳細がよくわかった。諜報班ちやうほうはんに文句を言おう。

「ん？」

ふと何か電子音が鳴る。幸太郎には心当たりがあるようだ。

「え〜つと、これだな」

制服の左内ポケットに入れてだした幸太郎の手元にはスマートフォンが握られていた。メールが来たらしい。

「ん？どれどれ。下僕、見せる」

「へいへい」

幸太郎はおとなしく河合さんにスマートフォンを手渡す。

「ん」と お兄ちゃん、ちよつと帰り遅いよ。母さんが心配してる。べつ、別に私が心配してるわけじゃないんだからね！！ by 悠はるか。へ？悠ちゃんついにツンデレになったのか」

「悠ちゃん？」

「俺の妹だ。やつはそこまで心配していないだろうが、母さんは心配してるだろうな。つーわけで帰るわ。じゃあな」

そういうと幸太郎は自転車にまたがると、家のほうへと漕こぎ出していった。

「河合さん。それじゃあ俺たちも」

「ああ、また明日」

自分たちの任務は基本的に学校の門を出て、大きい道に出るまでだ。あとは他の班が守ってくれる。ただ信頼の獲得という面からすれば、こういう寄り道も必須だ。第一、美里も楽しそうだ。

「たのしかった」

本当に楽しそうだ。

「今回の報告は以上です」
課長に報告する。

「よろしい。で、どうだったかね、学校は」

「久しぶりで疲れました」

「すつごくたのしかったです」

「そうか。ああ、あと私と強襲三班は今週末に陸自の東富士演習場に出向する。覚えておくこと」

『は！！』

敬礼で返す。

俺たちは現地に作った「分室」にいた。この「分室」は地方での任務の拠点になる。今回は前代未聞の超長期任務、故に俺たちは新築の高級マンションを縦横十字型に計5部屋借りている。こんなことをしているのは情報漏洩を防ぐためだ。俺と美里、そして課長の三人で当面の間、十字の交点にあたる部屋で生活することになっている。ほかの四部屋も夫婦や独身のエリートサラリーマンに偽装した課員が生活している。

「さて。晩御飯としよう」

課長は顔をほころばせて言う。結構な歳の課長だが、どうも料理が得意らしい。なんとも凄味のある、切れ者らしい初老の男の料理とは思えないほど繊細な料理が出てくる。独身生活だからだろうか。
「今日の晩御飯はビーフストロガノフだ」

「ねえ、いい？」

部屋のドアが開くと美里が入ってくる。

「どうした？」

「ちよつと寂しかったの」

「そうか」

「隣、座っていい？」

「ああ、大丈夫だ」

美里は俺の隣で脚を抱えて座った。度々こういうことがある。美里には何かトラウマでもあるのだろうか、俺のベッドに潜り込んでいたこともあった。そのたびに怖い夢を見たと言っていたが、本当のところはわからない。

「今日、一緒に寝ていい？」

「ん？いいよ」

「ありがとう」

美里は優しくしてもらいたかったのだろう。現に、この組織にいる少年工作員の殆どはテロや犯罪で家族を失ったり、家庭の不和があつて逃げて保護された人材が多い。第一世代の俺もそんな感じだ。彼女もそうだろう。

「寝よう」

美里は寝るのがいつも早い。

「わかった」

明日のために、今日は俺も早めに寝ることにした。

分室のうちの一つで私はとある人物に電話をかけていた。

「内閣総理大臣、ですか。不思議なものですなあ、国家に対してテロを行った人間を擁する政党が今や国会の第一党だなんて」

「貴様、電話口だからといって何を言ってるんだ。それが総理大臣たる私に対する態度か！」

その人物とは内閣総理大臣、萩原一雄。政治家一族の世襲議員だ。そうですとも」

「なにに！」

「当たり前です。法務大臣に学生運動で警官一人を爆殺した死刑廃止派の人権派弁護士。財務大臣に反米、反自衛隊活動家だった過去の人物。文部科学大臣に日教組の重鎮。おまけに総理、貴方

は就任式でいきなり同盟国であるアメリカに喧嘩を売り、事実上敵対している中国と韓国と北朝鮮に媚を売った」

「日本の外交はアメリカ中心じゃないんだぞ！」

「だから反日教育を行っている諸国に媚を売った、ということですか」

「ちがう！我が国は独立国家だ。今までの与党のやり方は日本のための物ではなかった！アメリカからはもう距離をとるべきなんだ！」

「どこが独立国家なのか。自衛隊は軍でも警察でも準軍事組織でもなく、事実上米軍がなければ安全保障の面で国家としての体面すら維持できない。にもかかわらず、なにを偉そうに独自外交をしようなどと考えているのか。私には理解できませんな」

「一介の公務員に何がわかる。私は内閣総理大臣だぞ！貴様らの部署なんていとも簡単に潰すことだって出来る！」

「ほお、小児性愛者は言うことが違いますな」

「……なんだと」

「貴方は、過去に少女買春の加害者だった。お気に入りは大体小学四、五年生の少女に学校指定の水着を着せそれを……」「これ以上言うな！」「おや、否定しない」

「き、貴様、な、なぜそのことを」

「我々の任務の一環です。敵対する勢力の弱みを握る、情報戦の基本です」

「こ、口外無用だぞ！このことは！」

「それはあなた方の貢献によります。我々に必要な予算を全額承認するよう頼みますよ」

「わ、わかった！だから、たのむから……」

ガチャッ

「よく耐えましたね、課長。あの資料で吐きそうなのに。胃薬渡して正解でした」

諜報班の稲垣敏子がコーヒを淹れ、私に差し出す。

「ああ、君の胃薬のおかげでビーフストロガノフを無駄にせずすんだよ」

「コーヒーを一口すすする。今回は普段より大分薄めだ。」

「この手を使うのは初めてだったな」

「今まではどの総理も必要性を十分知っていましたからね」

「逆に今回は自分たちに牙をむくことになるからな。余計に反発する」

初めての脅迫だ。ここまでどうしようもないほどに権力志向の強い総理を見たことがない。いや権力志向だけならまだしも職務や立場を理解していない。バカ息子が大企業の社長になつたも同然だ。

「なんであんな人格に育つたのでしょうか」

「帝王学で人格が歪んだのだろう。」

あんな幼稚な性格で東京大学法学部と大学院を首席で出ている。

精神年齢に比例してか小学生に性的一興奮こつふんを覚えるらしく、買春している事実もある。購入履歴を見るだけで吐き気を催してしまう。購入した最低年齢が7歳、最高年齢が11歳となるともはや病気だ。それでいいところの浮世離れた純粹培養のお嬢様を妻にしているのだから気味が悪い。

「書類作成後は速やかに就寝してくださいね。そのためにコーヒー薄くしたんです。神山と霧谷はもう寝たようですよ」

霧谷はわかるが神山もか。珍しいが、霧谷と一緒に寝てほしいと懇願したのだろう。

「それに弁当と朝食を作るんでしょう。寝不足だと包丁で指切りますよ」

「そうだな、早めにカタを付けるよ」

部下のありがたい忠告に従うことにした。鶏のから揚げの下準備も済んでいることだし、今日は片づける書類の数も少ない。早く仕事をして寝よう。

1st mission 登校初日(後書き)

いろいろ予定が立て込み大変スローペースです。
今後も続きますのでよろしくおねがいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4356w/>

正義のために……

2011年11月16日02時09分発行